日本社会における孤独・孤立問題とその対応

2024年12月3日

石田光規＠早稲田大学

本日の報告

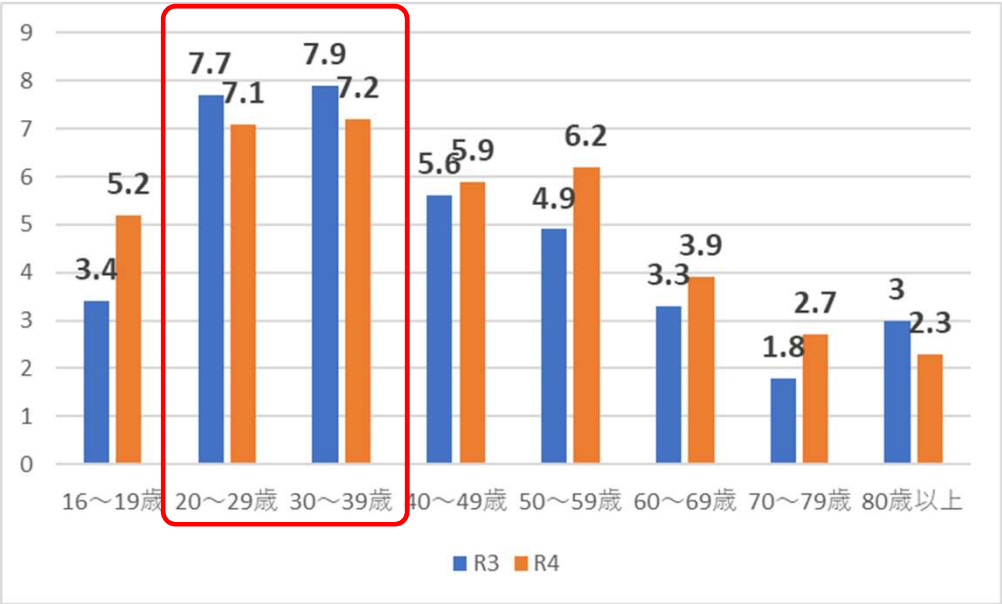
- 日本社会に横たわる問題
- 人を支える仕組みについて

１　日本社会に横たわる問題

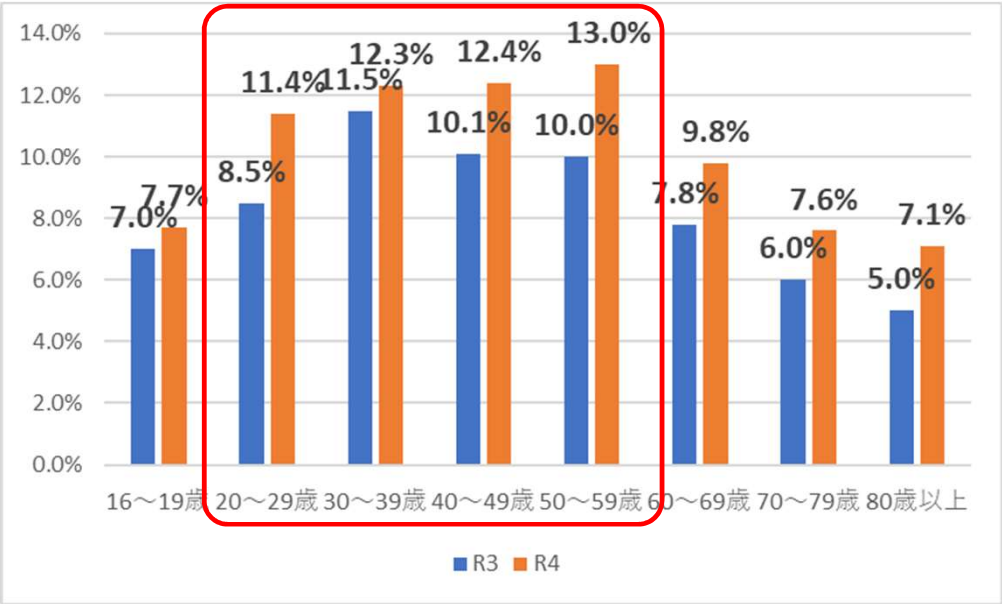
若年・中年層の懸念、高齢層の懸念

- 若年層・中年層の苦境とこれからの不安　（内閣官房『人々のつながりに関する基礎調査』から）
  - ➢孤独感の高い若年層
  - ➢相談相手のいない若年・中年層

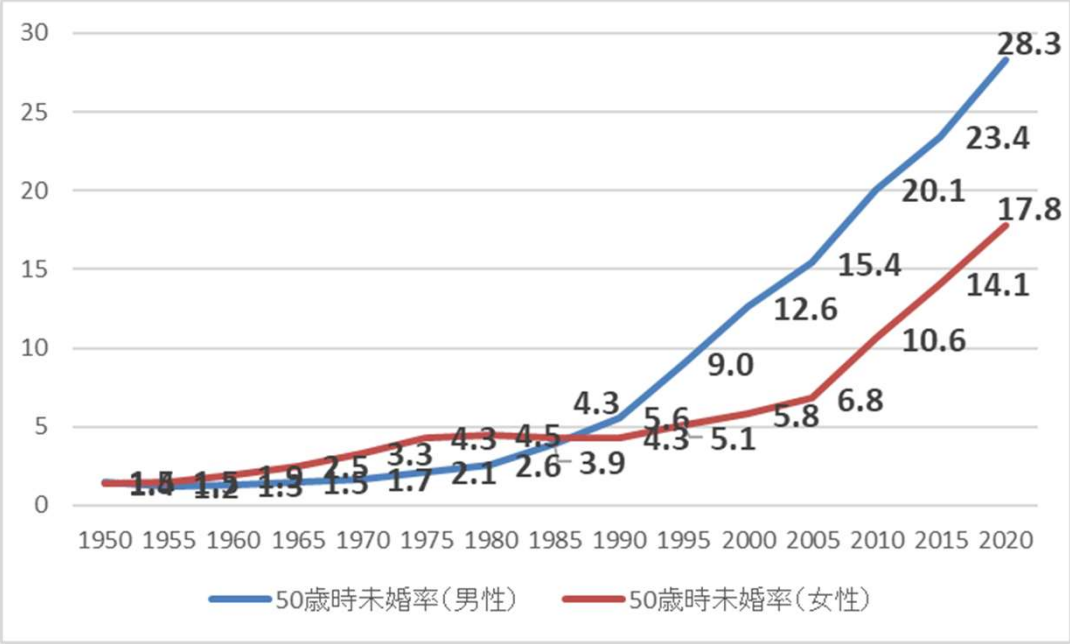
孤独感が「しばしば・常にある」人



相談相手のいない人



- ポスト家族の時代の若年・中年層
  - ➢激増する「生涯未婚」（50歳時未婚）
    - ✓男性の4人に1人以上、女性の6人に1人以上は50歳でも未婚
    - ✓親以外に一親等の「家族」をもたない人が高齢にさしかかる
  - ➢他方で絶大な家族のサポート効果
    - ✓サポート研究で圧倒的にサポート力があるのは一親等（配偶者、親、子）の家族
    - ✓日本社会で結婚しないことは、親以外の家族がいないことを意味する



家族のサポートが標準・当然ではない時代へ！

＝

✓ 単身の子が高齢の親を支え
✓ 自らを支えてくれる関係性は不足する（孤独・孤立の加速？）

- 高齢層の不安
  - ➢増加が予測される孤立死（誰にも看取られずに死後一定期間経過して発見された死）
    - ✓自宅で亡くなり死後4日以上経過した人（警察庁発表、2024年）
    - ✓65歳以上：半年で10,887件・通年換算で21,774件
    - ✓総数：半年で15,072件・通年換算で30,144件
  - ➢これから本格化する高齢化・単身化
    - ✓日本の2025年問題：団塊の世代（人口の多い世代）がすべて75歳以上に
    - ✓身元保証のない人びとへの対応の問題化、まわらない現場

身元保証のない搬送者への対応

亡くなった方々の事後の対処

他方での私たちの意識の薄さ

- 生協総合研究所の2023年調査：25歳から54歳対象

A	B	A,ややA	B,ややB
わずらわしくても人との付き合いが密接な社会がよい	さみしくても個人の自由を尊重してくれる社会がよい	34%	66%
目的や利点がなければ、わざわざ人とつきあう必要はない	目的や利点がなくても、人とのつきあいは不可欠だ	51.2%	48.8%
多くの人は自分のことばかり考えて行動している	多くの人は周りの人の幸せを考えて行動している	78.4%	21.6%

「助けて」と言えない・弱みを見せられない日本社会

つながりのあり方

相手や場の空気を立てることが大事

＋

社会の基本

努力をつうじて生活の糧（稼ぎ）を得る

つらさを抱えた人

マイナスの材料を出す

↓

場の空気を乱すかも

選んで貰えなくなるかも

迷惑をかけてしまう

努力不足と思われる

↑

人に頼る

なる「助けて」と言えなく

結果として見過ごされるつらさ

さらに・・

助けようとする人

あまり入り込むのも悪いかも

人それぞれ事情もあるし・・

行き過ぎた個人の尊重

自らは声がけしない

２　人を支える仕組みについて

支援につながらない人たちのポイント

- 3つの「ない」
  - ➢支援の対象だとは思わ「ない」
  - ➢支援の先を調べるゆとり・時間が「ない」
  - ➢支援の受け方がわから「ない」
- 内閣官房（2022）の調査から：孤独感別の支援を受けない理由

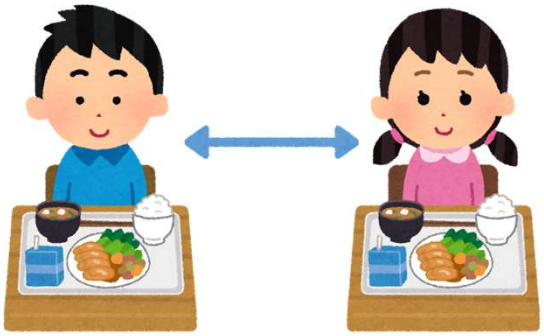
支援を届ける工夫が必要！

✓ 必要ない、我慢できると考える
✓ 受け方が分からない
✓ 面倒

	n	支援が必要ではないため	支援が必要だが、我慢できる程度であるため	支援の受け方がわからないため	支援を受けるための手続が面倒であるため	支援を受けるのが恥ずかしいと感じるため	支援を受けると相手に負担をかけるため	支援を申し込んだが断られたため（支援対象外の場合を含む）
決してない	1098	81.1%	13.0%	9.1%	4.7%	1.5%	0.9%	0.7%
ほとんどない	2783	74.0%	18.0%	12.0%	6.8%	1.9%	1.1%	0.5%
たまにある	1633	**64.2%**	**22.4%**	**20.2%**	**12.3%**	5.6%	3.1%	0.7%
時々ある	1361	**52.5%**	**22.6%**	**28.4%**	**16.2%**	8.0%	4.6%	1.0%
しばしば・常にある	426	**35.9%**	**20.4%**	**39.9%**	**20.0%**	**13.1%**	**10.8%**	4.9%

居場所、つながりをお膳立てする時代

一人になりやすく、人との距離を感じる社会



- 人それぞれ
- 本音を言えない
- オンライン化
- 配慮

居場所の政策化

- 1980年代：フリースクール・フリースペースから
- 2000年代：居場所が「いるところ」以上の特別の意味をもつように
- 2020年代：居場所政策の乱立

人とつながる機会を意図的に準備しなければならない社会

居場所を意図的に準備しなければならない社会

「居場所」を運営する

- 居場所づくりのポイント：二つのアクセス
  - ✓物理的アクセス：手軽に足を運べる工夫
    - ➢近くにある
    - ➢相談・交流を押し出すことの難しさ
    - ➢日常の行動と関連させる（食事、散髪）
  - ✓心理的アクセス：気を使わず居られるために
    - ➢受容と共感の好循環

- 段階的な参加と複数の財源
  - ✓段階的な参加：利用者と実施者
    - ➢利用者視点：求める人に届けられる工夫
    - ➢実施者：支援者と参加者を分けず、緩やかな参加の仕組みを
  - ✓複数の財源による運営：取るところとサービスを出すところ
  - ✓目的別の財源の検討：事業収入、補助金・助成金、寄付

まとめ：今後の日本社会の課題

- 直近の問題としての高齢者への対応
  - 増えゆく単身高齢者の見守り
  - 孤立死・孤独死、それに類する事例への対処

- 中長期的な問題としての中年層への対応
  - 家族という支え手がいない若年、中年層のつながりの再編
  - 居場所（集まる場所）の構築
  - つながりに後ろ向きな人たちへの対処